Fate/tormented magus

有馬 次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / t o r m e n t e d m a g u s

【Nコード】

N 7 4 8 9 X

【作者名】

有馬 次郎

【あらすじ】

魔術の名家に生まれながらも魔術を嫌悪し出奔した間桐雁夜。しかし運命は彼を魔術の世界に引き戻す。己の意思とは関係なく魔術の道を歩み始めることになる雁夜。彼はその先に見出すことになるのだろうか。

warped affection - 1 - (前書き)

はじめまして。

最近人気急上昇中の間桐雁夜さんのssを探していたのですが、意外なことに(この拙作を書こうと思った時点では)ありませんでした。

なければ自分で書いてしまおうと、無謀にも小説初挑戦です。

なお、作者はFate/Zeroに関してはTVアニメの放送及び公式HPしか情報を持ち合わせておりません。従ってTV放送に追いついた後は投稿が極端に遅れるものと思います。

また、Type-Moonの世界観は壊さないように努めておりますが、小説未読のため虚淵氏とは設定が大きく異なってくる場合があります。その点については、所謂並行世界における同一名称の別の存在ということをご容赦ください。

八年前

入梅し、一年で最も雨の降る時期。だが、元々冬木は梅雨の間でも雨量が少ない。

初夏の眩しい日差しが照りつける。七月下旬並みの暑さになるとテレビで天気予報士が解説していた。

しかし、その暑さも日が沈むまでのこと。夜になると過ごすのはちょうど良い。

海から吹いていた風も夜半過ぎには山から吹く風に変わっていた。

間桐雁夜は取材旅行を終え、一カ月ぶりに冬木に帰ってきた。

今は新都のビジネスホテルの部屋で次の取材の準備をしている。

3

出奔して早三年。間桐家とは絶縁状態になっていたが、それでも冬木に帰ってくるのは偏に葵に会いたいためである。

だが雁夜は会うたびに美しい女性へと成長していく葵に恋心を抱きつつも、それを伝えることができないでいた。

生活基盤が不安定なことはもちろんだが、魔術とは関係のない世界で葵には幸せになつて欲しいと雁夜は思ったからだ。

(子供の頃は、そんなこと考えなくてもよかつたのに)

幼い頃に出会った葵は仲のよい姉でしかなかった。

それがいつの頃か葵の何でもない仕草に女性を感じるようになってた。

恋慕の情と間桐の業との板挟みで悩んだこともあった。

それ等の想いを忘れたいかのように雁夜は頭を振る。

「葵さんが幸せになってくれればそれでいい。俺はそれを見守れば十分だ」

自分に言い聞かせるように雁夜は一人呟く。

葵を幸せにはできるのは自分ではない、他の誰かだと。

ふと目を時計にやると時刻は既に真夜中の二時を回っている。

今日は朝から禅城家で葵と会う予定だ。

(約束に遅れるなんて無様なことはできない。早く寝なくては)

葵の笑みを思い浮かべながら、雁夜は眠りに就いた。

冬木の隣市にある禅城家で雁夜を出迎えたのは、葵の両親だった。

「お邪魔します。おじさん、おばさん」

「やあ、雁夜君。よく来たね」

「さあさあ、葵も待っているわ。どうぞぐっすり」

十数年来変わらぬ気軽さで葵の両親は雁夜に接してくれる。まるで自分たちの息子のように。

事実、間桐家に馴染めない雁夜にとって禅城家が唯一心の安らぐ場所だった。

学生時代は間桐家には帰らず、禅城家に入り浸っていた時期もあったくらいだ。

普通の親なら思春期を過ぎた娘と同世代の男が転がり込んでくるというのもどうかと思うのだろうが、葵の両親は一向に意に介さなかった。

むしろ生真面目な雁夜なら将来の婿として大歓迎であった感すらある。

彼らが望むことは、葵自身が生涯の伴侶を決めて結婚することだ。葵にも雁夜のことをどう思っているのか訊ねたことがある。葵自身も雁夜のことには幼馴染みの域を超えないとはいえ、満更ではない様子だった。

だが、当の雁夜といえば、禅城家の皆に好意を見せるものの、葵への恋愛感情を全くといって見せない。あくまでも幼馴染み、姉弟かのように振舞った。

結局彼ら三人は、雁夜が葵に気がないのか、もしくは恋愛というもの自体をしたことがないと結論付けたのだった。

雁夜がリビングに行くと、そこでは葵が紅茶の準備をしていた。

「いらっしやい、雁夜君。今回の帰省は長いの？」

「こんにちは、葵さん。一週間から十日ぐらいかな」

「そうなの？ それならゆっくりできるわね」

「ああ、何なら男手の要る力仕事とか手伝おうか？」

「それならね、お願いしたいことが」

気心知れた二人はまるで昨日会ったかのように自然体の会話を続けていく。

だが、

「それよりも雁夜君、折角帰ってきたのなら、たまには臈硯おじさまにご挨拶に行ったら？」

「！」

葵の一言で雁夜の表情が強張る。

「か…りや君？」

葵が心配そうに雁夜の顔を覗きこんだ。

「ああ、ごめん。葵さんも知っているだろう？」

魔術師になるのを拒んだ俺は勘当されていてね、臈硯オヤジには二度と間桐の家の敷居を跨ぐなって言われているんだ」

慌てて雁夜はその場を取り繕う。

これ以上葵にはこのことには係わらせたくないし、聡明な葵なら察して話を止めてくれるだろうと雁夜は考える。

だが、今日の葵はいつもと違う。

「何言ってるのよ、魔術師だって人間でしょ？ 家族に勝る宝物なんてないわ」

葵の言葉に雁夜は黙って紅茶を口にし、思いに耽る。

(葵この人さんは分かっていない！ 魔術師が如何なる者なのかを。

それとも分かっているのか？ 分かった上でそれでも尚魔術師に愛情を求めめるのか？

魔術師は決して愛情など持ち合わせていない。非情に徹しなければ魔術師として完成しない。

魔術師は根源に至るためなら自らの命さえ顧みない。ましてや家族なんて道具程度にしか見ない外道だ！)

事実、雁夜は間桐家で魔術それを見せられてきた。臓硯バケモノの犠牲になった人達。その中には実の両親までいた。

故に雁夜は思う。

魔術師は人間などではない。利己的で他人に害を及ぼすだけの忌むべき存在でしかない。

魔術は根源に至るための学問などではない。魔術それが行きつくのは破滅だけだ。

「りん。りんくん？ んもう、雁夜君てば！」

雁夜が慌てて顔を上げると、そこには葵の姿があった。葵は頬を少し膨らませている。

(ああこの顔は子供の頃から変わっていないな。)

思わず笑みが零れた雁夜の顔を見て、葵の機嫌がますます悪くなる。

「さつきからどうしたの？ 黙り込んだと思ったら、今度はニヤケだして。」

「なぐんか失礼なこと考えていない？」

「（これは怒っているっていうより拗ねているって顔だな）」

「いや、葵さんの淹れてくれた紅茶が美味しくてね。つい堪能しちゃったんだ。」

「ごめん、おかわり貰えるかな？」

「ええ、ちよつと待っててね」

葵は自分の淹れた紅茶を美味しいと言われ機嫌を直す。そして雁夜からティーカップとソーサーを受け取ると、いそいそとキッチンへ新しい紅茶を淹れに行った。

雁夜は葵の後姿を見送り、一人になったところで再び考えを巡らす。

今日の葵は雁夜にとって何だか変に感じられる。魔術師の家庭というものがどれだけ特殊なものなのか葵は理解しているはずだ。今まで間桐家や臓硯の話を一言も口にしたことはなかったこともそれ故だ。それを今日、タブーを破るかのように雁夜にぶつけてきたのだ。

きつと何かある、これは確かめてみる必要があると雁夜は感じていた。

（ちよつと試してみるか）

雁夜は自分の考えをまとめる。

暫くすると、葵が自分と雁夜の紅茶を淹れなおして戻ってきた。

雁夜は紅茶を受け取ると一口飲んだ。

「うん、美味しい。前に専門店を取材したことがあるけど、そこより美味しいよ。」

そうそう、その専門店で聞いたんだけどね、紅茶っていうのは淹れた人のその時の気持ちで味が変わるらしいよ。（嘘だけどね）

葵さん、最近何か嬉しいことでも会ったのかな？」

雁夜は冗談めかして葵の様子を伺う。

すると葵は黙って俯いてしまった。それは困っているようでもあり、嬉しそうでもあり、悲しそうでもあった。

雁夜もただ黙って葵を見つめている。

重い空気が場を支配する。

どのくらい時間が経ったのだろうか。数秒、数十秒……それとも数分か、それ以上か。

永遠とも感じられる静寂を破ったのは葵だった。

「実はね、の」

「え？何だった？」

小さな呟くような声で葵は語り始める。だが、雁夜はそれを聞き取ることができず訊ね返す。

雁夜の続きを促す声が聞こえなかったかのように葵は再び沈黙する。

ただただ雁夜は葵の次の言葉を待つしかなかった。

やがて、意を決したように葵は顔を上げ、口を開いた。

「今、縁談がきているの……」

「そ、そうなんだ」

雁夜は動揺を必死に隠しながら相槌を打った。

なるほど、容姿端麗、才色兼備の葵なら引く手数多だろう。

最近葵に縁談が引つ切り無しにきていることは雁夜も知っていた。葵の両親が煽るようにそれを聞かせてくるのだ。「ぼやぼやしていると、葵がお嫁に行っちゃうよ」と。

しかし、今まで葵の口から縁談がきているというような話は一切出てこなかった。

雁夜は違和感を持った。今届いている縁談に葵は戸惑っているのか。雁夜に何かを求めているかのようでもある。

だが雁夜には葵の本心が分からない。だが、雁夜は葵のハートを射止めようとしているヤツには妬けるが葵が幸せになってくれるのならそれでいいと思った。

「それでね、雁夜君はどう思うかって……」

「（どう思うかって言われてもなあ……）」

それは葵さん次第だと思っよ。会ってみればいいよ。その相手が気になるんでしょ？

しかし葵さんが気にしている男には妬けるなあ。いったいどんな奴なの？」

内心穏やかではないが、葵には気付かれたくない。雁夜は平静を装い、茶化すように自分の気持ち吐く。

しかし、雁夜は葵の返事を聞いてこの発言が軽率すぎたと後悔することになる。

「遠坂時田さん」

.....T o b e c o n t i n u e d

warped affection - 1 - (後書き)

いかがでしたでしょうか。

処女作のため、表現力不足や言葉の誤用など何かと至らない点があると思いますが、温かい目で見守っていただけると幸いです。また、叱咤激励、アドバイスなどいただけますと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7489x/>

Fate/tormented magus

2011年10月20日03時03分発行